

視覚的要素を取り入れた知的障害のある児童生徒向け自記式ストレスチェックリストの作成
および信頼性・妥当性の検討

Development and Psychometric Validation of a Visual Self-Report Stress Checklist for
Children and Adolescents with Intellectual Disabilities

224J2007 高士 真奈
Takashi Mana

指導 小関 俊祐 准教授
Thesis Supervisor: Shunsuke Koseki

国際学術研究科国際学術専攻心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

Master of Arts Program in Clinical Psychology Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies J. F. Oberlin University

【問題】近年、「子どもの権利条約」や「障害者権利条約」の理念のもと、障害のある子どもに対する教育や福祉的支援は整備されてきた。一方、心理支援において、就学から就労への移行期では、支援体制の不十分さが指摘されている（特定非営利活動法人 日本医療政策機構，2025）。教育現場では、診断名や知能水準（IQ）のみに基づく支援ではなく、「一人一人の教育的ニーズ」に応じた柔軟な支援の必要性が強調されているが、その前提となる心理状態の把握には課題が残されている（山口，2023）。日本国内では、他者評価に基づくアセスメントが広く用いられてきたが、ストレス反応や精神的な不調は必ずしも外在化した行動として表出するとは限らず、本人の主観的体験にとどまる場合も多い（De Los Reyes et al., 2011）。このような背景から、自記式アセスメントは、本人が感じているストレスや不調を直接捉える手段として有効であると考えられる（Bramston & Fogarty, 2000）。とくに、視覚的要素を取り入れることで、抽象的な概念や回答選択の理解が促進される可能性が示されている一方で、知的障害のある児童生徒を対象とした視覚的要素を含む自記式ストレス評価手段については、実証的検討が十分とはいえない。本研究の目的は、知的障害のある児童生徒が主観的なストレス反応を把握するために使用可能な、視覚的要素を取り入れた自記式ストレスチェックリストを作成し、その信頼性および妥当性を検討することであった。

【方法】本研究は二段階から構成された。研究 1 では、既存のストレス反応尺度を基に作成した 12 項目からなるストレスチェックリストについて、色や数字といった視覚的構成の異なる 4 形式を作成し、知的障害のある児童生徒 24 名を対象に、選好されやすい形式を検討した。

研究 2 では、研究 1 で選定された形式を用い、特別支援学校・学級、放課後等デイサービス等を利用する児童生徒 110 名を対象に調査を実施した。分析にあたっては、本チェックリストの 12 項目を総合得点として使用可能性かを検討するため、主成分分析（成分数 1 固定）を用いて項目のまとまりを確認した。あわせて、Cronbach's α 係数および修正済み項目-全体相関を用いて内的-一貫性を検討し、記述統計量を算出した。さらに、児童生徒本人と支援者、保護者による評価の一致度について、重み付き κ 係数を用いて検討した。

【結果と考察】研究 1 の結果、色と数字を併用した視覚的構成をもつ形式が最も多く選択され、視覚的要素がチェックリスト形式の選好に関与する可能性が示唆された。研究 2 では、主成分分析の結果、すべての項目が第 1 主成分に一定以上の負荷を示し、12 項目を総合得点として扱うことの妥当性が示された。また、内的-一貫性は十分な水準を示し、総合得点による評価手段として一定の安定性を有することが確認された。一方、本人と支援者、保護者の評価との一致度は低い水準にとどまったが、一部の項目では有意な一致が認められた。これらの結果から、本チェックリストは、知的障害のある児童生徒が主観的なストレス反応を把握するための自記式アセスメントとして使用可能であることが示唆された。また、本人評価と他者評価の差異は、評価者の立場や場面の違いを反映した情報として捉えることが重要であり、主観的体験の把握を従来の行動観察に補完的に加えることで、日常的な状態把握や早期支援につながる可能性が示された。

参考文献

- Bramston, P., & Fogarty, G. (2000). The assessment of emotional distress experienced by People with mild intellectual disabilities: A study of different methodologies. *Research in Developmental Disabilities*, 21, 487-500. [https://doi.org/10.1016/S0891-4222\(00\)00054-8](https://doi.org/10.1016/S0891-4222(00)00054-8)
- De Los Reyes, A., Youngstrom, E. A., Swan, A. J., Youngstrom, J. K., Feeny, N. C., & Findling, R. L. (2011). Informant discrepancies in clinical reports of youths and interviewers' impressions of the reliability of informants. *Journal of child and adolescent psychopharmacology*, 21(5), 417-424. <https://doi.org/10.1089/cap.2011.0011>
- 特定非営利活動法人 日本医療政策機構 (2025) 『政策提言「知的障がいのある子どもの生涯にわたるメンタルヘルス支援強化に向けて」』 日本医療政策機構.
https://hgpi.org/wp-content/uploads/HGPI_20250430_Recommendations_Child-Health-Project.pdf (2026 年 1 月 28 日閲覧)
- 山口 遼. (2023) . 知的障害児の教育・支援に向けたアセスメント: 特別支援教育における知的機能の把握ツールと学習手立てに関する検討. 東京学芸大学学位論文. https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/record/56060/files/DK_2023_400_fulltext.pdf (2026 年 1 月 28 日閲覧)